



生徒の発想を地域の支援で具現化。 絶滅危惧種の保全に力を合わせる

岐阜県立羽島高校

取り組みの概要

岐阜県立羽島高校は、2021年度から3年次の選択科目「課題研究」で、地元の羽島市が力を入れる淡水魚「イタセンパラ」の保全活動に取り組んでいる。同魚は、同市に隣接する木曾川、大阪府の淀川水系、富山県氷見市の河川のみに生息する日本固有種で、国の天然記念物であり、絶滅危惧種にも指定されている。同魚の保全活動に十数年来取り組む「世界淡水魚園水族館アクア・トトギス」の池谷幸樹館長から、「まずは魚の認知度向上が課題」と聞いた生徒は22年度、以前新商品の開発に協力した地元和菓子店「兎月園」と協働で、同魚をイメージした蒸し菓子を開発。水族館と同店以外の販路を模索していると、その活動に注目したテレビ番組の仲介で23年度、地元のプロサッカーチーム「FC岐阜」と連携することに。生徒が試合会場でコラボ菓子を販売したところ、150セットが3時間で完売。その成功をきっかけに、生徒から活動のアイデアが次々と出てきている。



地域の視点

高校生のアイデアと行動力で 魚の認知度向上に弾み！

イタセンパラの繁殖や啓発活動などを推進する池谷館長にとって、長年の課題は魚の認知度向上だった。

「イタセンパラは食べられませんし、川で見つけることも難しい魚です。啓発活動として市立図書館に魚を展示したり、小学校で講演したりしています。が、過性の活動にとどまっています」

その課題に取り組んだのが、羽島高校の生徒だ。多くの人が手に取りやすいようにと、同魚をイメージした蒸し菓子を開発。蒸し菓子の表面には生徒が描いたイタセンパラのイラストを焼き印し、また、売り上げの一部が保全活動の資金に充てられるようにした。

「お菓子は水族館や郷土の土産になりますし、購入が保全活動の貢献になる仕組みはよいアイデアでした。宣伝効果が高く、認知度向上のキラーコンテンツになると感じました（池谷館長）」

その活動を知った地元密着型チームの「FC岐阜」が、試合会場内にコラボ菓子の販売場所を設置した（写真1）。自身も初めてイタセンパラを知ったという社会連携担当の鷺見有香さんは、「高校生と一緒に館長からイタセンパラの現状を学び、地域の自然を守る活動に意義を感じました。高校生の活動は地域の活性化にもつながりますから、今後も支援していきます」と語る。



イタセンパラのコラボ菓子

写真1 試合会場では、コラボ菓子の販売に加えて、イベントステージでイタセンパラを大々的に紹介。PRのチラシ600枚を、親子連れが中心の来場者に配布した。



左から／池谷幸樹（世界淡水魚園水族館アクア・トトギス館長）、鷺見有香（FC岐阜 社会連携グループホームタウンチームチーフ）

学校の視点

学校外の大人に認められることで
自信を持ち、自ら動き出す

市内唯一の高校である同校は、全国大会への出場実績がある吹奏楽部が地域の祭りで演奏したり、「Sクラブ」*1が地域でボランティア活動をしたりと、主に課外活動で地域連携を行ってきた。そこから一歩踏み込み、生徒の学びに直結する地域連携を実践しようと、羽島市に相談してイタセンパラの保全活動に参画することにした。

「課題研究」の授業のみでの活動だったが、「FC岐阜」との連携によって生徒の動きが活発になった。高校生とJリーグによる地域連携を紹介するテレビ番組で同校の保全活動が取り上げられ、生徒がオンライン出演。他の出演校の地域連携の内容に刺激を受けるとともに、テレビ局から紹介されたアドバイザーから、「君たちが動かないと始まらないよ」「アイデアがあれば実現を支援するよ」と声をかけられ、生徒は奮起。水族館を訪れてイタセンパラの生態などを改めて学んだ。課題研究担当の浦部陽先生は、学校外の大人から認められることで生徒は自信



左から／中田啓士（教務部長、地理歴史・公民科【世界史】）、下野宗紀（校長）、浦部陽（進路指導部長、課題研究担当）

を持ち、意欲がさらに高まったと語る。イタセンパラの現状を自分の言葉で説明することができるようになり、「活動継続のために、子どもへの認知を広げたい」「子どもに分かりやすく説明するにはどうする？」などと、次々と意見を出すようになりました。生徒は、マーケティングを学ぼうと朝日大学経営学部でゼミを見学。保全活動を紹介したところ、ゼミ生から「小学生がよく使うものをグッズにしてはどうか」という意見が出た。すると、生徒から下敷きなどの案が上がリ、24年度の活動につなげることにした。

地域学校の視点

保全活動の輪を広げる中で
生徒の学びを深め、
地域の自然を守っていききたい

生徒指導が厳しい時期もあったが、地域連携が活発になってからは校内が落ち着いてきた。下野宗紀校長は、「学校外の人と接する際、生徒は自然と自分を律します。それが学習面にも好影響を及ぼし、週末課題も発展内容まで積極的に取り組む生徒が増えていきます。また、生徒や保護者の学校への満足度が向上しています」と成果を語る。「後輩に保全活動を継続してほしい」



写真2 イタセンパラのPRチラシの内容を小さな子どもが理解できるようにと、美術部の生徒が紙芝居を制作（*2）。それを教材にして環境教室を実施することも検討中だ。

「1年次から取り組めばもっと発展させられる」といった声が生徒から上がっており、24年度は地域連携をさらに深い学びの場にすることを目指す。教務部長の中田啓士先生は、「地域から連携の依頼が増えている中、教育効果がより大きい活動となるよう、生徒が企画段階からかかわる連携を強化したいと考えています」と展望を語る。イタセンパラの保全活動については、川の清掃活動や小学生向けの環境教室などを検討中だ（写真2）。生徒がコラボ商品として文房具のアイデアを話すと、驚見さんは「一緒に取り組めそうなパートナー企業があるので紹介しますね」と応えた。連携の輪が広がり、生徒の活動が活性化して学びが深まる。「長良川などを有する『清流の国さぶ』の活動として発展させたい」と、生徒、教師、地域、皆が意気込む。

学校概要

設立 1921（大正10）年
形態 全日制／普通科／
共学
生徒数 1学年約160人

2022年度卒業生進路実績 4年制大は、朝日大、岐阜協立大、岐阜聖徳学園大、金城学院大、相山女学院大、中京大、中部大、名城大などに延べ23人が合格。短大・専門学校進学41人。独立行政法人大学校進学2人。就職49人。

お勧めの分掌
管理職
教務担当
進路担当
担任

*1 主にボランティア活動を行う部活動。 *2 紙芝居は、『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。下記URL、または右の2次元コードからアクセスしてください。https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article18393/

